

源本拾遺信長記

後篇

八

特別

13

2507

21



門 遠
 2507
 23-21

繪本拾遺信長記後篇卷之八

目録

ト中叔上人事

信長難年ト中叔上人と被_レ以

如_レ上人南紀_ニ開_レき_ニ終_レふ

信長暗_ニ為_レ官_ニ上人事

下_ニ同_ニ於_レ簾_ニ中_ニ武士_ト然_ル

中_ニ武士_ト上人_トを_レ追_フ

定專方雅成

鑒るの森中坊門徒の男女系勅の圖

明智光秀の謀叛之事

石山表関城

教如上人播州下向

石山燒失

繪本拾遺信長記後篇卷之八

ト半般上人事

叔父おじ 叔父おじ 如上人にょじやうじん の御嫡男ごてきなん 叔父おじ 如上人にょじやうじん の御計ごけい 又また 跡あと に 跡あと に 一ひと 人にん

そゝる御必の常つねにちういせ給たまはいざる麻あさの衣ころも又葉はづつとめさす

付僧^{だそう}繼^{つぎ}三人^{さん}を石^{いし}つ道^{みち}ら道^{みち}後^ご道^{みち}延^のひ一^{いつ}本寺^{ほんじ}と出^でて紀^きの語^ご

ある貝塚として急がせ給ふ実なる祖聖人の小紙をととら

終さひめきき疾イ雪ゆきのの何なををししてていい終はるるにに海ふみ度と又また苦くしさうう

く 夢ひ せん かく やと 夢ひ あは され たり ト 定 ^{かゝる} へ 思ひ けり ぞ

上人のくせはよく目撃き且よくいさまぐりてさう

なりけるが信長の邪智ふくみ執銀ある大なるいへ上人の密よ

此に素くせ給ふと親ひ知くんりたうくまにと上人と佛ぶつ檀だん乃

日本書紀後卷



信長が
ト字が
菴又上
人を
披に





如上人
南紀
用き
後

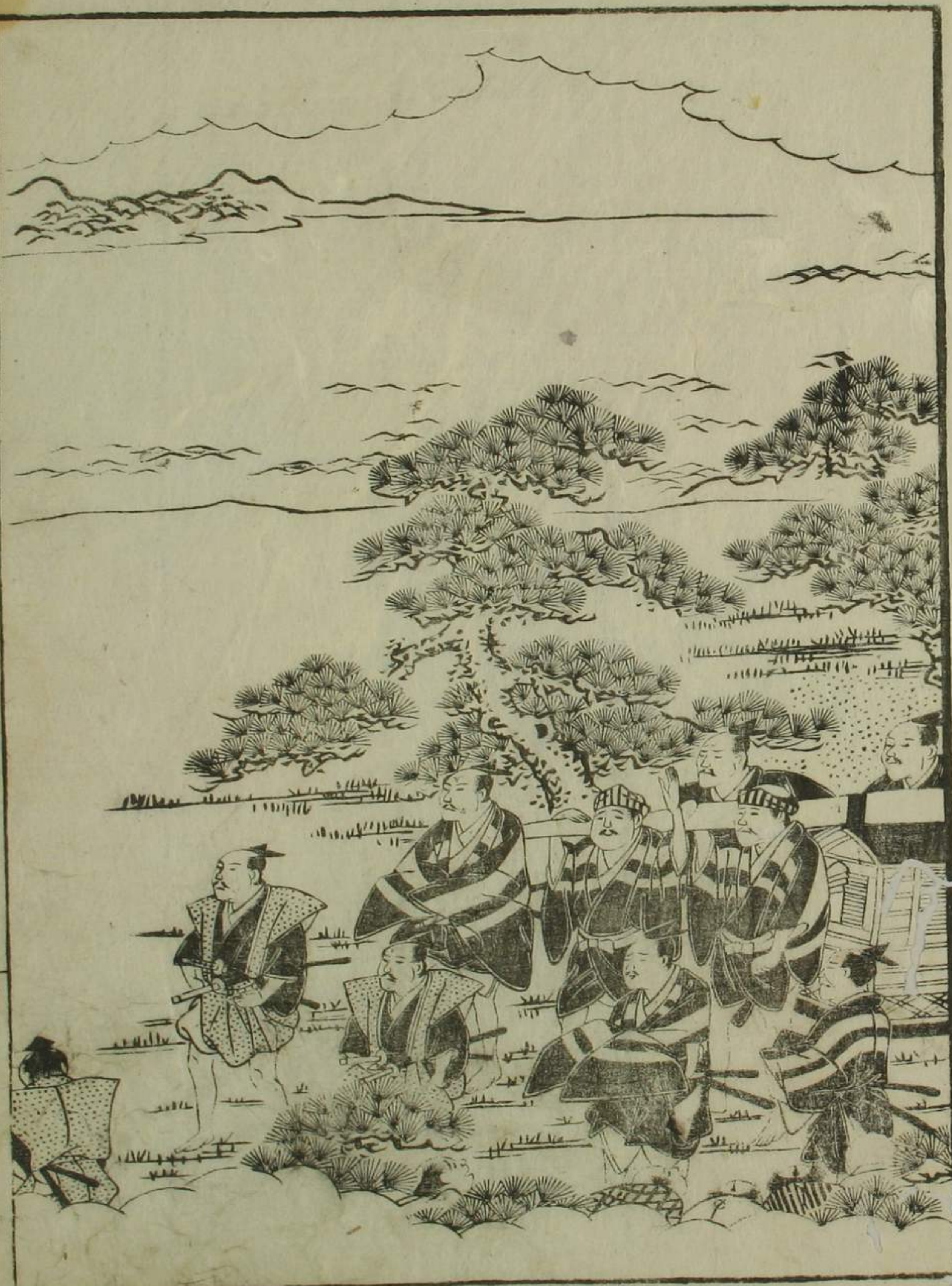


とや上人の危き難とト申が勢きうてのうと移ひ其翌日ト申
只一人をまつしと云ふく紀州と若せ移ひたり

信長膳所宮上人事

日月九日於如上人紀州路の森へうつせ移ふと披露先河臺所
と弟又男阿茶丸と申方後又准如上人と申なる今年に歳又
かへせ移ふを河母子合輿ふと云はれと河系物の麓と開うと云
これいど人の御輿ふと云はれしうみなりとぞ其日の未刻
卯刻といやう小長儀をつくりいど人の御通好といひき河輿の
左右は道士の軍數十人僧侶の衆中百人計次は三番の定
寺は方丈下間於藤原と云はれ河伏し石山と出て隈とじて急せ
移ふ其路は門後の道信太路に越ひ河をらばしと人を拜する

若歳十万人と云ふ数と知しに城番東門の留んたる今又玉
城と云ふは仰ぎるなるに河法なりき移る隈の津又
若せ移ひ是より河船と云はれせと申河系物と云はれ入船
よせ河船へうつしと云ふせんともなる小長儀乃兵士三百余
人河武士山城の次安と云はれせ此のうのなうけ民家の内は
まのび居たりしと云ふ時分はしと云ふ種こそあは上人の河系
物へ強炮と云はれ六十八方より周と他門へ付て出たり河
系物の人へ門後の面へ仰天し道士僧侶等八方へ散れと
る河武士等得たりかしと河系物と云はれなるあはと云はれ
押へし下間於藤原と云はれ接て踵来り悪き頼籍者かのみ信長
の也し若よと云ふ討こそ奇勝なり一人も生けてい歸とはし



と云へく、この案なるは彼者ども怒くは信長のまじしものとい
目利が遠くぞ我軍の天下の間に主人をおび置く我場は付
来し敵武者と龍をく武を利を我武者ぞや當時大名
多き家にも勝る大富者の如上人と云ふ酒代を盡さん
通はしと云ふ八方より来る切立案を我へししもの
下回多勢といふはさきうて一方と切破りしと来し通は
は我武者多し逃る者うは目うけに上人の首と云ふと御衆物
の戸を開けに上人は「まさけ我物と云ふき案のりもの
こいふ所の間上人の逃れ給ひるやと仰ると二人の曰く
いやく是の事我等の者どもくわんとなうり知り兼
てより宝衆物を堅固して此石を送り来りし」と云ふる

如上人いふる悟き法師よりと云ふる急なる事と我物と
おて逃はしきぞとお笑ひぬ僧の中よりおまじしもの
たると云ふるなり追うけて坊主僧と吟味せよと八方より
して我物と追うるものなるに三番の定専坊逃れて
や這くのりまうて候者の方よりなるは我武者のたぬ追うけて
難く定専坊を引捕へたは何者かぞ如上人の何國（あち）
初しやありれすふやと云ふは命の助くはしと怒くは云ふる
を定専坊はしと強に汝等我武者強盗うへ金銀衣類とこそ
求むべきは上人と被討んと云ふ小田方の兵卒よりけ度
勅定を云く小田本親寺和睡とのひ機と云き退き給ふ上人を
伏兵とて討んと計るは遠勅の衆のうづらむく退く信長



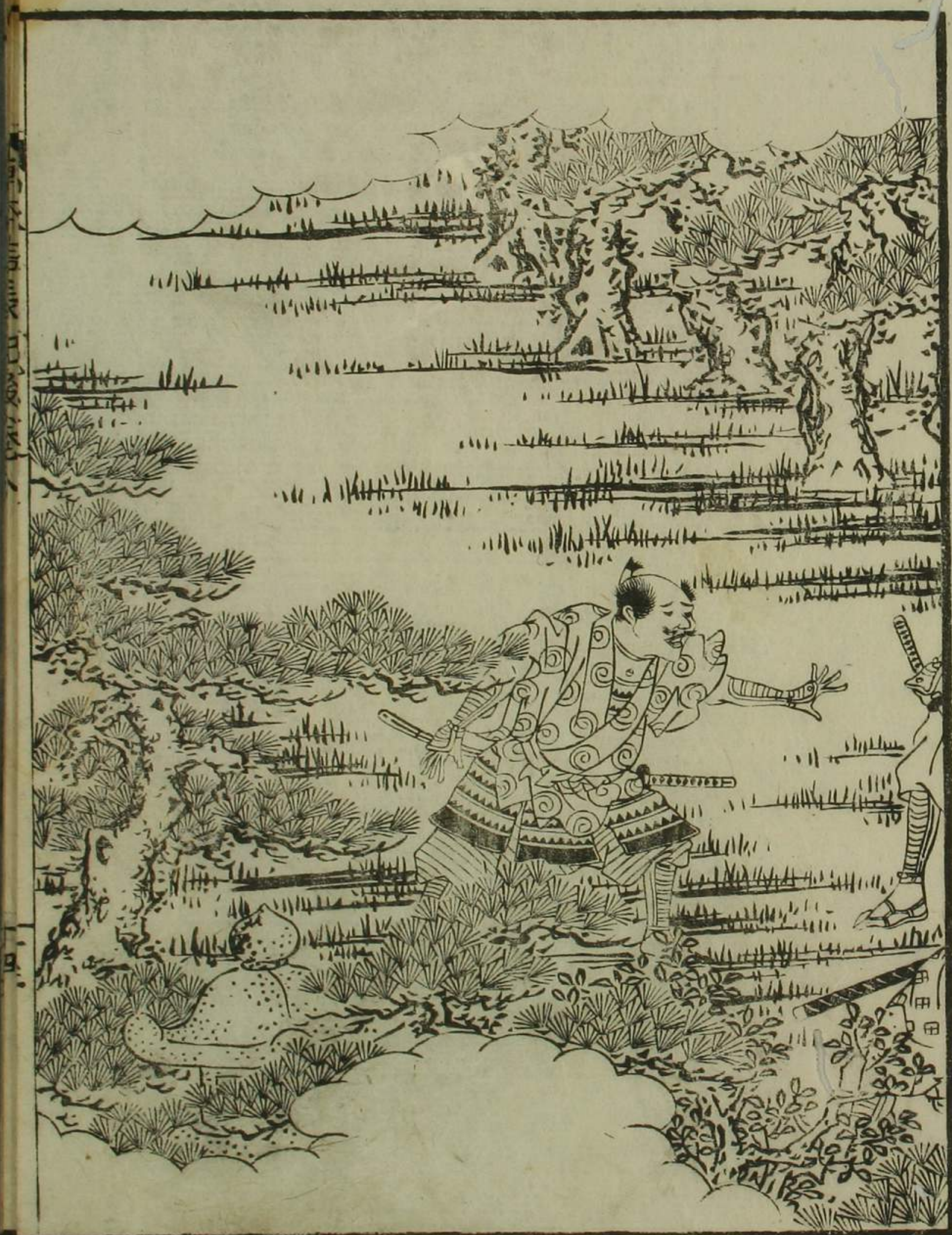


するに足る^あへあり、定専^{じやうせん}防^{ぼう}が信孫^{しんそん}に楠士^{なんし}郎^{らう}虎^こ藩^{はん}門^{もん}勢^{せい}州^{しゅう}あり、よく度^いく
 合^あ戦^{せん}を^をし、右^{みぎ}の足^{あし}は、殊^{こと}胞^{ほう}底^{てい}三^{さん}ヶ不^ふあり、と受^う是^しより、儀^ぎと改^{あら}め、又^{また}
 以^もて、つゝ又^{また}押^お武^ぶ士^しを^をて、さうば其^{その}底^{てい}を^をつゝ、あよと引^ひ倒^{たお}して、とて
 づゝ不^ふ律^{りつ}谷^やが、詞^{ことば}は遠^{とほ}うに、其^{その}痕^{あと}あり、叔^{しやく}に定^{じやう}専^{せん}防^{ぼう}は、遠^{とほ}ひに、我^{われ}は
 元^{もと}来^{きた}は、武^ぶ器^きの衣^いれを、剥^むを、勝^{かち}利^りとせり、無^む用^{よう}乃^な坊^{ぼう}主^{しゅ}首^{くび}切^きせ
 ん、とけと衣^いれと引^ひ倒^{たお}し、皆^{みな}らうとぐゝ又^{また}降^{くだ}りたる。

石山園城乃事

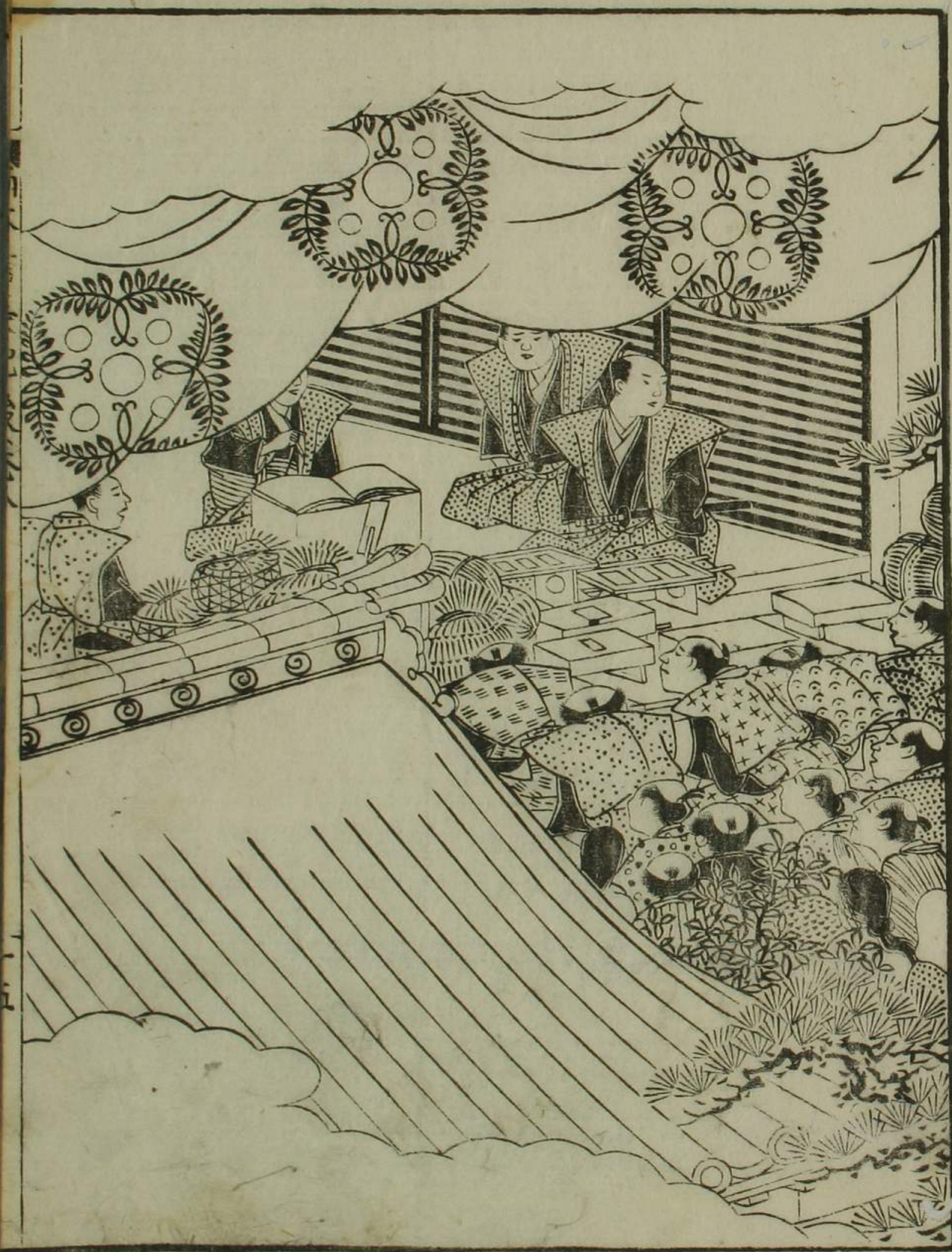
玄々こころとふ所如上人しやうじんの先達せんたつて急いそすく紀州きしゅう難がた々々若わせ終はつひ出で國くにの
 門かど後のち多おほ弛し集あつりて後のち多おほの森もりといふあり一いつうの坊ぼう舎しやと建たてしことと
 飯いひの本ほん堂どうとあるに御ご美み親しんを要えふはしくと云いふく世よ不ふ成じやう御ご恒こう
 活こころの地ちと定さだめりとも云いふされば小こ回かい石いし信しん長ちやう公こう如に上人しやうじん退たい去その上うへに

石山の城地より清見谷とて碓同右邊門尉矢部若七郎あ
る命一撰州と雖もむ耐る石山の城中は於如上人の嫡男
教如先事上人再び門後をわたりい密圖を籠城して防戦の用
急ぎびく城地引渡はぎ急ぎ又はと告来りこれに碓同
矢部の兩人と共に急ぎ信長へ此方つまじう小言上
これに信長は於如上人退城の初いそう小失いまいせんとの謀計
しむにきくあり今又新門先事勅定又遠い折書書は宵き再び
籠城せよとてきていんとやこれを怒り給ひざらん今に國々の
軍兵を催はし於如上人首と見どい折言く軍とく人」と目次
の強暴百倍して東海東山小陸の軍勢を催し其方先事京都
馳参り禁廷は参内して於如教如が遠勅の衆と奏聞し渠等を



定事坊
雅依

日本長言後卷



西本信長言後卷ハ

西郷ひとく富みやうの番天の下王民よりうづらひに「勅をひく
和膳をいしめ給ふに降るにて新築するにふは是朝敵なるを
一たび朝敵の名にあらざる者其門の衆に」といふをいふにさうに
遠く山と退き何國をとりあはせしめふは法流を勅化めんこ
そ宗祖の心よりかゝるるをきれとさまぐ「何ぞらさるれば今
いうもさるべきやうにいひて新門得心ありて来る七月廿
八日また諸將のこゝにいらひ山城おほし」やべきおし言ふ
てを田助修守西郷も降参に「降参し石山城の論本津樓の
岸川が丸山廣芝山山麻呂を振るに」と「摂河泉の間
ふみ十一箇所の若くは居たり」若くも今日をかぎりといひ
明てをのがさまぐ「右様左様は引くらふ教如上人いひ細ありて

七月廿六日の夜いそふ城とまのびおし山船より石山城の森
へへせ給ふとまは小田家より城邊の役人隊同矢部のあ人
再び下へ石山へ入城し「はまぐ」は番を居堅固に守り
るに八月二日の夜天火降りて諸堂殿舎一すものごとく火に
及びける濃く山に聖徳なるの未来記にまうせと草創の
一霊場をいじきりて兵馬の足は汚るるを佛のふくもた
まひと忽ち引くらひ給ひるるに悲しきものなり「ふた
明徳元年運如上人山を建立し」てより今年天正八年
まう八十三年が同おほありける山と一時的煙とあり果る
を門下の道信をあげ悲しくさういふなり

明智光秀謀叛之事



備に於如上人の紀伊國邊の森に後伯はしくくれども信長
 が狼心を抑えては居る所の狼籍やみえきれと家老諸門後
 いふまゝに安き心いさふかゝあやうき月日とあらうせ給ひぬ
 信長もよも年来事戦ひし石山の城地を得給ひし一とて
 背懐に教にたれた教如上人物と背きのうて勢威ありし
 ると海へ渡り給ひていゝく上人所へを寄せんものと候ぐ
 工事を漸く給ひしうにが勅定の執事とて遠征はしとの
 折々書の要し乾うさるふ事討んぬとありてあらうく狼
 籍の海はらうりしやふか教寺ふは今の信長の如くも解
 へやと少い心と安んじ給ふに二三年が経て来りて折に
 三人正十年の五月中國毛利家征伐の信長下向みえき中とて

流大なる命して進くは下うるを中國の先年より羽柴
 秀吉等秀吉下向してまづく毛利家と對戦し此處に
 して信長教ある序に國九州とくく表伏らるべき
 この御うりて御息男祿を侍候信教に國征伐の熟なる
 て二万余騎と引率して進給ある其後見ても羽柴即左衛門
 長秀相後へく既と候表すく出張し此所信長征伐する
 ときは驍の森の如く一箇家の坊を兼ふ門後とて併せんものと
 兼て小羽又即左衛門より合ふに國渡海と被給ひし不意に
 於て驍の森（押）よせ奉教寺と表干渉しと命せらるる小
 長秀の委細かゝこまり候の澤とて自分なはし驍の森（押）
 んと密に其用表えたり然る小此所は信長の勇め明智



教如上人
攝州
下白

日向守光秀信長と眼もなり謀叛の企てるがこれに中國
の加勢として先陣は後向もなき命せらるる又月廿八日安土
を立てて中國丹州龜山へ移りて小信長の上洛ありて中務寺
と旅籠と徳川御旗本の勢は三百余人揃ひあつて光秀
幸の附なり此期と先づいふに謀叛のとうり
と伝へるが所は光秀つゞく思惑をせざるにいま我
信長と討得るとも柴田勝家瀧川一益丹羽長秀羽柴秀
吉が守りつゝと信長恩顧の者どももこれに馳参つて我を
代む其時より天子をさしえと諸國は令へて味
方と振へる國々の國々を頼るに中務寺よりいふに
元來中務寺門後の面々年来信長は眼もあきけり

方人からぐと恩案へ又月廿八日の夜半は急役と紀州
路の森へ立て密に如上人の書状を呈し其父の號を
信長年来中務寺の宗門とありて法滅せしめんとする
石山の地を不中事とせ度く合戦は及ぶとて人々も敵軍
つゝと勝利を得て安土の勢は衰へていふに
終る石山と奪ひ上人御父の勢は衰へていふに
國征伐と号し三七信長丹羽長秀の大軍と率へて
後向これ其實に不意に發て中務寺と素人拮据あり
信長は天魔の心と似て佛法を降辱せんといふに先
に中務寺不退の叡山を焼崩し今又高野山とて滅却せ
しやんとて先づのつゞきとていふに



石山焼



上人は若し信長が軍勢の向うなるにあらば又く御用を以て
然るに万一反戦難儀は及びけり某いふふれを敷ひ奉り
とてさうく又御中ひまはしくとぞ告ぐる所如上人此知
らせし難き後ふり大あらうに一家中又集めさまぐ評議
あつる小光秀もまた高山と若信と通へる所をなさり
今かくれどく密の事を告ぐる心得に討文信長の至
君にて先秀の腹脹の事なり良しとて其の要を云ふ
當寺の方人せん中ひまはしくとぞ議論ありける
下回於藤やうといひ信長が謀計とこそおぼしめし先秀を
してかくのどした密の事を告ぐせ當寺は然るかと難き國
くの門後を奪り討戦の用を成るはとてや本願寺こそ再

い勅命の事を忘し信長は款對せんといふこと朝敵極
とはじと退討の宣命をやり討たふに何んといふと
そとにぞ難きや難きや款の謀中又入るにとやける
又何とま信長が款雄といふべと皆く此候は月一とぞと
用をいせざりける

繪本拾遺信長記後篇卷之八終

